部落問題文芸・作品選集

第43巻

大泉黒石　俺の自叙伝

世界文庫版

部落問題文芸作品選集　第四十三巻

昭和五十二年八月二十日発行

発行者　松本富夫

発行所　株式会社世界文庫

東京都目黒区洗足二―一二―一五
電話　〇三（七一六）六一五一（代表）
（七一三）九二四四
振替　東京　四―七八四九八番

定価は箱帯に表示

落丁、乱丁本はお取替えいたします。

自畫自讃

近世最大のユウモリストといはれるマーク・ツウエインのことを說くには、彼、餘りに有名すぎるが、ほんたうだか、嘘だかは知らぬ、物の本によると、彼、あるとき秘書係の募集を試みたさうだ。募に應じて彼の許に來る者の一人々々に向ひ、彼の秘書役に適するか否かを見るために色々の質問を發した。

次なるはその一例である。マーク・ツウエイン問ふて曰く『貴君は拙者の秘書に應はしき性格や技能を持つてゐると思はれるか？』と。應募者莞爾として答へて曰く、

『はい。たしかにさう思ひます。第一に私はユウモアを解し、ユウモアに富んでをります。私は常に人をして笑はしめることが得意であり巧みであります。先生の秘書となりましたならば、先生のためには、先生がお書きになる作品の、好箇のモデルとなるでありませう。何故ならば、私は常に先生を笑はせるからです。』と。

こゝに於てマーク・ツウエイン、例の髭面を顰め、頭を横に振つて曰く、

『そんな人は拙者の秘書役には向きません』といつて、この自稱ユウモリストを斷つたさうである。この話。元來ほんたうだか嘘だか知らぬと、私は言つたが、マーク・ツウエインの言ひさう

な挨拶だから、恐らく後人の作ではあるまいと思ふ。

十遍舎一九子が、東海道筋の或る宿屋に泊つてゐるとき、かねて『膝栗毛』を愛讀してゐる男。作者の人物を想像して、いかに、面白をかしい大將であらうかと思ひ、わざわざ一九子をその宿屋に訪ねて會つて見ると、意外、面白くもをかしくもない、然らば左樣と四角張つた物固い嚴めしい、笑顏の一つも見せない修身の先生然たる小父さんだつたので、大いに面喰つて引退つたといふ。いかにも一九子にありさうな逸話だ。

マーク・ツウエイン。十遍舎一九。概ねかくの如し、不肖大泉黑石。ユウモリストを以て自ら任ずる者に非ずと雖も、ユウモアの持合せに至つてはマーク・ツウエイン。十遍舎一九が如き輩に比べて遙かに富めりといふ。冗談ではない。而も人物の眞劍眞摯なることも亦敢て彼等に劣らず。これ。本書に收錄したる數篇の生活記錄の明らかに實證するところだ。

ニヤ〳〵笑ひながら書いた樣りや、ひとりよがりの駄洒落を以て世にユウモリストと稱する者の作品と同日に談じられては、やり切れない。と爾云。

作者識

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

俺の自叙傳

少年時代

一

アレキサンドル・ワホウキッチは、俺の親爺だ。親爺は露西亞人だが、俺は國際的の居候だ。あつちへ行つたり此方へ來たりしてゐる。泥坊や人殺しこそしないが、大抵のことはやつて來たんだから、大抵のことは知つてゐる積りだ。ことに、露西亞人で俺くらゐ日本語の旨い奴は確かにゐまい。これほど圖迂々々しく自慢が出來なくちや、愚にもつかぬ身の上譚が臆面もなく出來るものぢやな

い。露西亞の先祖はヤスナヤ・ポリヤナから出た。レオフ・トルストイの邸から二十町ばかり手前で今殘つてゐる農夫のワホウキッチと云ふのが本家だ。俺の親爺は本家の總領だつた。日本の先祖は何處から來たんだか、あまりいゝ家柄でないと見えて系圖も何もない。祖父の代から知つてゐるだけだ。俺の祖父は本川と云つた。下の關の最初の稅關長がさうだ。維新頃日本にも賄賂が流行したと見えて、祖父は賄賂を取つたのか、取り損ねたのか、そこははつきり知らないが、長州の小さい村で自殺した。あまり人聞きのいゝ話ではないが、恥を打ち明けないと眞相が解らないから、敢て祖先の恥を晒す。嘸不孝な孫だと思つてゐるだらう。俺のお袋 Keita（惠子）はこの人の娘だ。俺を生むと一週目に死んだから、まるで顏を知らない。そんな理由から親類の有象無象が俺のことを仇子と云ふんだらう。俺には兄弟がない。天にも地にもたつた一人だ。露西亞の先皇が日本を見舞つた——その時はまだ彼は皇太子だつた——とき親爺も末社の一人だつた。親爺が長崎へ立ち寄つたとき、或官吏の世話でお袋を貰つたんださうだ。その時親爺はまだ天津の領事館に居た。お袋は露西亞文學の熱心な研究者だつた。それは彼女の日記や藏書を見ても解る。それで、親爺がお袋を呉れろと談判に來たとき、物の解らない親類の奴共が大反對をしたにも拘はらず、彼女は默つて家を跳び出して行つた。舊弊人共が、お惠さんは亂暴な女だと、攻擊した。「わたしは、その時、どうしようかと思つて困り果

たばな」と、祖母が言つた。俺は二十七だ。

支那海の浪が長崎港へ押寄せて來るまともに英彦山が見ゆるだらう。山麓の螢茶屋から三つ目の橋際に芝屋小屋があるだらう。その隣りが八幡宮だ。鳥居をくゞると青桐の蔭に白壁の暗い家がある。今でも無論ある筈だ。そこでお袋は俺を生んで直ぐ死んだ。死んだとき十六だつた。「おばあさまに難儀をかけずに、大きくなつてくだはれ」と云つて息を引取つたさうだが、おばあさまには、それ以來難儀のかけ通しで、まことに申しわけがない。乳母は淫奔な女だつたと誰でも言ふ。俺を三つまで世話して、情夫と豐後へ駈け落ちする途中、耶馬溪の柿板で病歿したさうで、乳母の母親が、娘が可哀さうだから、何卒石塔を一基建てゝくれと何遍も頼みに來たが、頑固な祖母が、不人情な我儘者のお惠（乳母の名もお袋と同じだつた）に建てゝやる石塔はないと云つて何時も斷つたさうだ。だから今でも乳母は石塔のない土饅頭の下で眠つてゐる。俺の代になつたから、こつそり建てゝやらうと思ふが、いつも自分一人を持てあましてゐる位だから、そこまで手が出ぬ。乳母が逃げた後は、祖母の手一つで、曲りなりに育つて來た。俺は癇癪持ちだから、隨分だゝをこねて老婆を弱らせたと云ふが、それはほんたうだらう。俺が泣くと、雨が降らうが、風が吹かうが、山の麓から海岸まで背負うて行つた。祖母は目が悪い處へ持つて行つて餘り智慧のあるたちでなかつたから、俺を背中へ縛りつけて

海岸へ行つて、海を見せさへすれば、得心して泣き止むものだと定めてゐるらしかつた。今でもあるが、その時波戸場に大きな、まんまるい大砲の丸があつた。

『ほら、大砲ん彈。な。ふてえ丸ぢやろが。よう見なはれ。唐人船うちに使ふたもんばい、ふてえ彈ぢやろが』と云つた。『ふてえ丸ぢやろが』を何百遍聞いたか知れない。祖母の方でも、俺を持てあましたらうが、俺の方でも、大砲の彈丸には飽き飽きした。俺が三つの時、化け物のやうな奴が突然やつて來た。俺は玄關で乳母と一緒に裸で鞘豆の皮を剝いてゐた。するとこの化け物が俺の顏を見てかつと赤い舌を吐いて抱かうとするから、俺は鞘豆のざるを抱へたまゝ泣き出したら、臺所から油蟲と一緒に祖母が飛んで來て『まあ〳〵。おとつつあんたい。よう來なはつた』と、あべこべに化け物にお辭儀をしたことを記憶えてゐる。これが俺の親爺だ。その時分八幡樣の石段の下に、高山彥九郎の後胤が貧乏世帶を張つてゐた。此家の爺さんが、俺が日本を離れるとき『ジャッパン國にキリシタンの御堂を建立したなあ、この俺ぢやと云ふてくだはれ。オロシヤ人は喜ぶばい』と云つた。誰に事傳てするのか、それは本人も知らないらしかつた。長崎に黑船が來た時、中町にキリシタンのお寺を建てようと云ひ出したのがこの爺さんで、俺の祖母と一緒に高臺寺の繪踏みを恐れて暫く姿を眩ましてゐたんださうだ。中町のお寺は今名物になつてゐる。爺さんは漆師だつた。俺を可愛がつて春德寺下

の幼稚園へ入る手續きをしてくれたのも、この高山の爺さんだ。幼稚園で俺の組に、色の黒いギスギスの子が居つた。大きな柴メリンスの帶をしめて異彩を放つてゐた。その時分メリンスの帶なんぞ卷いて歩く子がなかつたからだらう。先生はこの子を一番可愛がつて小便までさせてやつた。高木と云ふ長崎代官の子と俺が、竹竿で先生を叩いたとき、半日罰を食つて廊下に立往生を命ぜられたら、メリンスの帶が來て手を叩いて囃した。代官の子と俺が相談してメリンス帶を毆ると、わい〳〵泣き乍ら、下女を小使部屋から呼んで來た。

「若樣。この子でございまするかのし。」

と下女が俺を指すと、メリンス帶がウンその子だ。早う叩つてくれと云ふ。

「畜生。この異人めが、若樣をようたゝいた。」と云ひ乍ら俺の頰つぺたをぐつとつねつた。代官の子は慄へてゐた。代官の子なんてものは弱いもんだ。だから親爺が代官をやめられて、目藥を賣つたり神主なんぞになるんだと思つた。メリンスの帶は小松原英太郎の子だつた。もう大分大きくなつてゐるだらうよ。その親爺とは少し違つてゐるから譯を質問したら祖母が偉さうな顏をして、

「そら、あんた、おとつつあんは、露西亞のお方のけん、ちつた違ふとつたい。」と敷へて呉れた。

露西亞のお方けん。靴穿きで疊を荒したり、石臼の上にお釋迦樣のやうにあぐらを搔いたりするの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だと云ふことも解つた。然し何故俺の側へ始終居ないのか解らない。隣の車屋の三公や煙草屋の留太郎が毎晩徳利に酒を買つて門前を通る。俺は祖母にあれは誰が飲むかと尋ねた。説明によると三公や留太郎の親爺が飲むんださうだ。俺の親爺にも買つて飲ませたいが、一體何處に逃げたんだと、折り返して聞いた。そしたら、

『はんかをに居らつしやるけん。こつちで酒を買つてやらんでもよか。』

と云ふことだつた。はんかをは酒を飲まないんだ。三公の親爺も留太郎の親爺もはんかをに行かないから飲むんだ。然し町内で徳利を下げて酒を買ひに行かない子は幅が利かぬ規則になつてゐたから、俺の親爺も早くはんかをを免職にして歸つて來ればいゝ。日に二度でも三度でも徳利を振廻してやると残念でたまらなかつた。俺は幼稚園へ入つたばつかりだつたが近所の子に負けるのは嫌ひだ。蝋掛屋の子が一番俺を酷めた。此奴が、

「おめえの親爺は酒がのめねえのか。」と云ふから、

「俺の親爺は、はんかをだから飲まねえぞ。」とやつつけた。そしたら此奴が、

「はんかをなんぞ、うつちやつちまへ。」

「うつちやるもんか。はんかをば高價いぞ。」

「いくらだい。」

俺は生憎、祖母にはんかをの相場を聞いてゐなかつたが、默つて居れば、はんかをを馬鹿にするから、大抵行軍將棋位の値段だらうと考へて少し安いとは思つたが、

「五錢だい。さまあ見ろ。」と凹ませて歸つた。祖母に、はんかをは五錢にいくつ呉れるか樣子を糺すと、はんかをは一つたいと答へて呉れた。一應尤もだ。はんかをは五錢に一つと定めて、それから、はんかをの事を誰が尋ねても、高いから一つだ。親爺は、はんかをを賣つて了つたら俺の家へ戻つて來るんだと威張つてやつた。

大きくなつてから學校の先生に、はんかをは支那の都會だ。かうかきますと、漢口と云ふ字を書いて敎へて貰つた。もひとつ腑に落ちない奴がゐた。それは俺の家に、俺が生れぬ前から寢てゐる女だ。この女を祖母がお母さんと呼べと命令したから、中途はんぱから具合が惡いけれども、止むを得ずお袋にして間もなく死んだ時も、お袋なみに、わかりよく泣いてやつたが、あとでこの女の正體が暴露して、ほんたうはお袋の姉だといふ證據があがつたとき、いくら可憐いがつて貰つたつても、少し泣き惜みすればよかつたと後悔した。ところで、家族は祖々母と祖母と俺と三人になつて、小さい西山といふ町の家へ引越した。親爺は不人情な奴だ。到頭二度と長崎へ來ないで了つた。俺は櫻の馬

場の小學校を三年生で打ち切つて漢口へ親爺の顔を見に行つた。親爺が露西亞領事館にすましてゐるから、領事館で小使ひさんをやつてゐるかと思つたら、親爺が『領事はわしぢや』と吐しをつた。この處で說明をする。俺の親爺はウィッテ伯爵と前後にペテログラード大學の法科を出た支那通だ。何、始めから、こんな臭い處に來る氣ぢやない。やつぱり國會議員で通す意氣込みだつたらうが、儲かると思つて、政府にだまされて追ひやられたんだらう。親爺は法學博士だ。俺は二十八で博士になつた。お前も俺を見習へ。さうするとアレキサンドル・ネヴスキー勳章はゆづつてやると云つた。その時は俺だつて二十八で博士になる約束をしたやうに覺えてゐる。親爺が明治三十四年に死んで、俺は到頭孤兒になつて了つた。然し、親が揃つてゐたつて、滿足な人間になるやうな手輕な兒でないことを自覺してゐたから、親がなくても不自由だとも、肩身が狹いとも思はなかつた。親爺が漢口で死んだ年俺は遺骸をウラヂヲストックの露西亞人の墓地へ埋めに行つた。その足で叔母ラリーザとそのまゝモスクワへ行つた。親爺には三人の兄弟があつた。二人は男で、一人は女だ。女が叔母ラリーザだ。男の方は二人共藪醫者で、モスクワに一人、西伯利のイルクーツクに一人開業してゐる。俺が叔母ラリーザとモスクワで落ちついた處が、その三男の藪醫者の家だつた。此處にもまた伯母が居る。馬面の三十代のフィンランド女で、ターニヤと云つた。俺は甥の癖にこの馬面の伯母をターニヤ、タ

ーニャと呼びつけにしてゐた。

しみつたれで、見え坊で、足を洗はぬ前がマルイ劇場附の女優だつた故か、馬鹿にひがみ根性の、嫉妬心の深い女だ。生意氣に、女權擴張者のソフイ・コワレヴスカヤなどゝ往復してゐる。バーチナがどうの、ペロヴースカがどうの、イアキモヴがどうのと變な本を買ひ込んで來て伯父に喧嘩を吹つかけてゐた。俺はこのターニャが大嫌ひだ。お前の母さんは日本人だからキヨスキーは露西亞人ぢやないと言ふ。キヨスキーと云ふのは俺のことだ。俺をターニャにあづけて置いて、叔母ラリーザは巴里のローマ教女學校へ教師に迎へられて行つた。その時分俺はニコラス二世の乘馬軍服が、その頃流行つてゐたので、學校通ひの制服に、ねだつて拵へて貰つて小學校へ伯母の家から出掛けたもんだ。讀本を開いて「犬が吠ゆる」。「狼がうなる」「鷲が叫びます」なんて、露西亞だけに「ハナ・ハト・タコ・マリ」と穩かに行かないから面白いと思つた。荒つぽくて、何でもガサ〳〵して珍らしかつた。

二

俺はモスクワの小學校へ放り込まれたが、露西亞語が滿足に解らないので、半年の間啞で通した。何と譏られても平氣でにこ〳〵してゐた。困つたのは運動時間に露西亞人の子が、不思議な奴が來た

と云ふので、俺の周圍に、うよ〳〵集つて勝手な熱を吹いてゐた。それが五月蠅くつて仕様がない。露西亞人で露西亞語が解らないなんて、天下の奇觀だ。然し三年たつたらやつと解つた。そしたら巴里の叔母ラリーザから、自分の勤めてゐる學校の先生で、お隣りの中學校にも教へに行く人がある。其處で生徒を募集してゐるから來い。來る氣なら、こちらから暇を見て連れに行くと云つて來た。

「叔母さんの側なら、いつでも行きたい。」

と返事を出して置いた。それは十二月の中頃だつた。雪が引つきりなしに降つてゐた。

俺は頭が單純だから、何でも、くど〳〵書くことが嫌ひだ。書かうつたつて書けない。自叙傳なんか、くど〳〵やつて行つたら締りがない上に、きりがつかぬ。大ざつぱな處、俺が巴里へ返事を出して二三日したら、ターニャと伯父は、ペトログラードへ病院を建てるから地所の選定に行くと云つてモスクワを發つた。俺は、よく俺の話の中へ出て來るイエドロフの宿屋へ當分の厄介をかけることにして、即日其處へ引移つた。アレクセイ屋と云ふ行商人の木賃宿だ。どうせ俺をあづかつて世話するといふ家はその位の處だらう。イエドロフは宿星の方は細君のサミャとサミャのお袋にまかせて、自分は馭者を本職にして、始終伯父の處へも出入したから、知つてゐるんだ。俺の荷物は長崎の大德寺の門前で買つた二圓五十錢の柳行李が一つあるだけで懇意の憲兵に錢をやつて宿まで擔いで行つて

貰つた。宿は「雀が丘」にあつた。細君のサミヤと婆さんが出て來て『キヨスキーは今夜から、うちの者になるんだよ』と云つて歡迎して呉れたのはよかつたが、俺にあてがはれた部屋が寒い上に、階段の昇降口にあつたから騒々しくつていけない。部屋を取り替へてくれと頼んでも、そこが一番上等の部屋だ、あとはみんな勞働者があばれるから、壁も床もこはれてゐると容かなかつた。部屋は俺が荷物の中から聖畫像を出して掛けたら住めるやうになつたが、食ひ物の拙いのには弱つた。それも我慢するとして、今度は下等な露西亞人が、扉を蹴るのに閉口した。自分の部屋の扉を開けるのに、何も靴で蹴らなくつたつて、排して入ればいゝのに、無暗に蹴つて音を立てる。それも辛棒するとして、今度は煙草の煙とアルコホールが鋭く鼻を衝いて來る。晩になつてイエドロフが戻つて來ると、他に能がないものだから、婆さんと口論する。サミヤが子供だと思つて、いつでも俺の部屋へ飛んで來て、めそ〳〵してゐた。或晩烈しく妻のサミヤと口論したイエドロフは翌朝、ふらりと家出したまゝ歸つて來なかつた。意氣地なしの厄介者が何處へ失せ居ると、婆さんは結局喜んでゐた。サミヤは淋しさうな樣子をしてゐた。そして、俺を捕へて、うちの亭主は養子だ、やれ、家出しちや飢ゑ死にするだらうと云つた。然しどうしたのか一向戻つて來ない。厄介な宿屋だ。俺は毎日々々巴里から叔母が迎ひに來るのを待つてゐた。仲々來ない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com